

北谷町

# クマヤー 洞穴遺跡

北谷町字砂辺



26° 19' 56.16" N  
127° 44' 50.88" E



## 用語解説

### ●鍾乳洞

石灰岩の割れ目から入った雨水や地下水の溶解作用によってできた洞窟(どうくつ)。洞窟内は地下水が流れ、天井からは鍾乳石、下からは石筍(せきじゆん)等が立ち並ぶことが多い。

### ●墓域

墓のある区域。墓地。

### ●ヒスイ

つやのある緑色の宝石。沖縄には産出しないが、縄文時代から使われている。本州の北陸地方から運ばれてきたと考えられている。

### ●避難壕

沖縄戦中に敵軍の攻撃から身を隠す場所として、自然洞穴や墓が利用された。

ヒスイはどうやって  
沖縄まで運ばれたのかな。



●砂辺クマヤーガマ



クマヤー洞穴遺跡は砂辺の鍾乳洞の中にある遺跡です。この洞穴は地中を東西に約40m延びており、東端部の天井が陥没(落ち込む)して地上と繋がり、入口として利用されました。開口部付近の太陽光が入る3畳分ぐらいのスペースに縄文時代前期(約5000年前)から人々が利用していた痕跡がみられます。

縄文時代晩期(約2500年前)には墓域として利用され、約50体の人骨が折り重なっている状況が確認できました。新しい遺体を置く時には古い人骨を移動させ、頭骨は北側に手足の骨は南側にまとめました。また、人骨と共に貝や動物の骨を加工した腕輪・首飾りやヒスイの装飾品が出土しています。ヒスイは新潟県産で、日本本土との交流が行われていたことがうかがえます。

沖縄戦の際には米軍の艦砲射撃や空爆から逃れるために、砂辺集落の人々が鍾乳洞全体を避難壕として利用しました。現在、砂辺集落では洞穴から出土した人骨の納骨堂を建て大切に保存・管理しており、集落の人達の心の拠り所となっています。

### 【参考文献】

・北谷町史編集委員会。1994。  
『北谷町史 第三巻(下):民俗 下 資料編2』。北谷町役場。



発掘調査区



5000年前から戦時中まで長期間にわたり利用された洞穴遺跡



埋葬人骨



クマヤー洞穴入口



新潟産のヒスイで作られた装飾品が見つかったのだ。ヒスイは沖縄県内で19点しか見つかっていないのだよ。



埋葬人骨に伴う副葬品  
(ヒスイ・骨製品・貝製腕輪)



# 北谷町

ちや たん ぐ す く

# 北谷城

北谷町字大村城原



26° 18' 32.55" N  
127° 45' 59.34" E



## 用語解説

- 郭  
城内の平場を土塁や石垣などで囲んだ区域の名称。曲輪(くるわ)とも書く。
- 高麗青磁  
朝鮮の高麗王朝(918~1392年)で作られた青磁。その代表的なものには、素地に彫った文様に赤土・白土などを埋め込んだ象眼青磁がある。
- 青花  
中国産の染付(白地に青色の模様がある磁器)。
- 按司  
13世紀頃に誕生した地域の支配者。

国道58号を車で走っていると、大きな丘が見えてくるけど、それが北谷城だったんだね。

この城は、首里城跡、今帰仁城跡、糸数城跡、南山城跡に次いで大きなグスクなのだよ。大川グスクとも呼ばれてるよ。明代の青花や青磁など首里城に匹敵する貴重な壺や瓶が見つかったのだよ。

## 現在の北谷城とその周辺



## 17~18世紀頃の北谷城 (想像図: 中村 愿氏作画)



北谷城は町に残る唯一のグスクで、グスク時代(約800~600年前)に造られました。標高30~40mの小高い丘の上を利用して四つの郭(区画)が設けられ、石垣で囲われた部分の総面積は約1万4700㎡にもなります。これは県内で五番目に大きな規模で、郭の中からは建物の跡や中国で作られた茶碗等の他に、東南アジア産の壺、高麗青磁、日本産の播鉢も発見されました。なかでも明時代初期(14世紀後半)の青花の壺と瓶の出土は県内でも数少ないことから、北谷城が独自に明国(中国)と交易を行っていた可能性もあります。

伝承によると、北谷城を巡って三代にわたり按司(豪族)が争ったとされていますが、文字による記録がほとんど残っていないため、その多くは謎に包まれています。按司同士の争いの後、最終的に城主は北谷按司に落ち着いたと言われています。

現在は国道58号沿いの米軍基地内(キャンプ瑞慶覧)に位置しており、立ち入ることはできませんが、謎に満ちたグスクとして古くから地域の人々に知られています。

### 【参考文献】

・北谷町教育委員会. 2015. 「北谷城: 2015年度版」.



● 二の郭



● 舎殿の配石遺構



北谷町に残る唯一のグスク



● 今も残る石垣 (四の郭)



● 城門



● 青花梅瓶 (中国産)



● 天目茶碗 (中国産)



● 鉄絵合子 (タイ産)



● 青花壺 (中国産)



● 青磁 (中国産)



● 摺鉢 (備前産)



# 北中城村

# とぐち 渡口 どうけつ いせき 洞穴遺跡

北中城村渡口



26° 18' 16.2" N  
127° 48' 34.0" E



## 用語解説

### ●細粒砂岩

水底にたまった砂が固まってできた岩石層。その中で特に硬く固結した部分を沖縄方言で「ニーピヌフニ」と呼び、石材として使われる。

### ●拝所

神霊が依りついたとされる聖域で、人が拝むところ。



●洞穴近景

小さい洞穴だね。  
どのような人たちが使っていて、  
いつの時代から墓として  
利用されたんだろうね。



遺跡の側には、  
「渡口の梵字碑（とぐちのぼんじひ）  
アピラウンケン」が置かれているのだよ。



### ●洞穴入口



### ●遺物散布状況



## 拝所として今でも地域の人々に 大事にされている遺跡

渡口集落の北側、細粒砂岩丘陵の崖面に立地する洞穴遺跡です。洞穴の開口部は東側を向いており、その前庭や遺跡に面する道路沿いから、海産貝や土器等が採集されています。これらの特徴より弥生～平安並行時代Ⅳ期（約1700年前）からグスク時代初期頃（約900年前）の遺跡と考えられます。

現在、この洞穴の内部には年代不明の石灰岩製の厨子甕（納骨器）が安置されています。

この遺跡には、不思議な逸話が残されています。『北中城村史』によると、昔この拝所の北側にある家々に災いが続出したのでユタに占ってもらったところ、「拝所の下に地位の高い先人の遺骨がある。それを掘り出して祀れ」との御告げがありました。御告げに従って掘ってみると人骨や石器が出土したとのことでした。



北  
中  
城  
村

# ヒニグスク

北中城村屋宜原



26° 18' 27.73" N  
127° 47' 17.81" E



### 用語解説

- 野面積み  
加工していない自然の石を、そのまま積み上げる石積み。もっとも古くからある積み方。
- 熙寧元宝  
中国の宋時代(960~1279)の1068年から1077年の間に作られたお金。



●南側上空より

このグスクを残すためにトンネルを掘ったんだね。これからも大事に保存したいね。

面積は約3000㎡もある。石斧や貝製品なども出土しているよ。馬の骨がたくさん出土しているのが特徴のなのだよ

#### 【参考文献】

- ・北中城村教育委員会社会教育課編, 1990, 『北中城村の文化財』
- ・北中城村教育委員会, 2014, 『北中城村の文化財』

●石積み(北西より)



●東側虎口

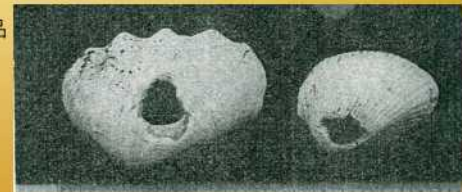


### 破壊の危機を乗り越えたグスク

喜舎場の北西側、沖縄自動車道トンネルの上にあります。採石によって大部分が破壊されていますが、それ以前は城門や石垣が残っていました。現在は野面積みの石垣が一部残っています。1962(昭和37)年に高元政秀氏によって発掘調査が行われ、グスク土器、銭貨(熙寧元宝)、13~15世紀の中国産陶磁器等が得られました。

県内にあるグスクの多くは、そのグスクを築いた按司の名前や由来等の伝承がありますが、ヒニグスクについてはそれが残っておらず、謎に包まれたグスクといえます。

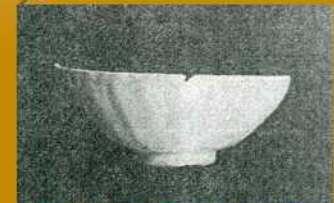
●貝製品



●石器



●青磁碗





# 中城村

# 糸蒲遺跡

中城村南上原



26° 14' 46.51" N  
127° 46' 24" E



糸蒲門中の人たちが、津覇に移るまで住んでいたムラの跡なんだね。

## 用語解説

- 門中  
先祖が同じ人からなる一族。主に父系の血がつながるもので構成される。
- 滑石製石鍋  
長崎県西彼杵半島一帯に産する滑石を加工して作った鍋。煮炊きを目的とし保温性に優れる。
- 『琉球国由来記』  
1713年、首里王府によって編集された。琉球国各地のグスクや御嶽の由来、古くからの行事などについて調べた本。全21巻。
- 『遺老説伝』  
琉球国各地に古くから伝わる民話や自然現象の異変などについてまとめた本。『球陽』(1745年)の外巻として、同じ頃に編集されたと考えられる。
- 糸蒲寺  
いつ建てられたか不明。『琉球国由来記』(1713年)によると、1700年代にすでに寺が無いことがわかる。日本からの渡海僧が住職をしていたが、ある時箱の中に「消え」、その直後に寺が炎上したという伝説がある。
- 田芋発祥の地  
糸蒲寺のお坊さんが、日本から持ってきた田芋を寺の近くに植え、そこから琉球中に広まったという伝説がある。



遺跡のあった時代には、「中城ハンタ道」という幹線道路が通っていたんだ。また、丘の上には、沖縄戦で亡くなった人々を祀った「糸蒲の塔」もあるよ。

土器

## 発掘調査風景



## 陶磁器・土器



## 12世紀末～18世紀までの三時期の集落遺跡

糸蒲遺跡は字南上原の東側、丘陵の崖沿いにある集落遺跡です。

この集落の人々は、時代が経つにつれ生活が便利な海岸部へと移り住むようになります。その末裔の一つが現在の津覇集落を形成した一族(糸蒲門中)だと言われています。

遺跡は2010(平成22)年に公園整備に伴う発掘調査が行われ、12世紀末～13世紀、15～16世紀、18世紀の三つの時期の遺物包含層があることが確認されました。遺跡から中国産の白磁や青磁、本土産陶磁器、沖縄産陶器、土器、石製品(滑石製石鍋)等の遺物が出土しています。

また、『琉球国由来記』や『遺老説傳』という琉球の歴史を記した書物によると、糸蒲遺跡の周辺には、糸蒲寺があったことや、田芋発祥の地としての伝承が記されています。

【参考文献】  
・中城村教育委員会、2014。『古道ハンタ道』。



# 喜友名東原 ヌバタキ遺跡

宜野湾市喜友名



26° 17' 2.1" N  
127° 45' 51.03" E

## 用語解説

- 竪穴住居跡**  
地面を浅く掘り下げて床面とし、その上部に屋根を葺く構造の住居の跡。
- 炉跡**  
火を使って調理等をした跡。住居の外にある場合もある。
- サメの歯に孔を開けた製品**  
サメ歯有孔製品とも呼ぶ。サメの歯に磨きを加えているものもあり、アクセサリーとして、あるいは呪術的な力を得るために身に付けたことが考えられる。

サメ歯



どうやって硬いサメの歯に孔をあけたんだろう。



骨製品



多くの住居跡や道具(土器・石器)サメ歯や木の実、動物の骨などが出土していて、当時の人々の暮らしがわかる遺跡なのだよ。



## 発掘調査風景



土器出土状況



石器



## 竪穴住居の小規模集落遺跡

この遺跡は、喜友名区にある縄文時代後期(約2500年前)から弥生～平安並行時代I期(約2000年前)の人々が生活していた集落跡です。これまでの発掘調査で、規模や形に違いが見られる20基以上の竪穴住居跡に加え、調理や暖を取るために火を焚いたと考えられる炉跡、用途不明の穴の跡等が見つかりました。さらにサメの歯に孔を開けた製品がまとまって10点以上出土した他、土器や石器等の道具、木の実、動物の骨等も発見されました。これらのことから当時の人々は形がさまざまな竪穴住居に住んでいたことや、小規模な集落をつくり、木の実や動物の肉等を食糧とし、貝や骨で作ったアクセサリー等を身に着けたりしていたことがわかりました。

### 【参考文献】

- ・宜野湾市教育委員会. 1989. 『土に埋もれた宜野湾』.
- ・宜野湾市教育委員会. 1991. 『ヌバタキ』.
- ・宜野湾市教育委員会文化財課. 1995. 『沖縄人のルーツを探る!: イガルー島宜野湾展』.
- ・宜野湾市教育委員会文化財課. 2013. 『宜野湾はじまりや! ~シマ・ムラ、チネー・イエへの歩み~企画展示会図録編』.



宜野湾市

# 真志喜森川原 第一遺跡

宜野湾市真志喜



26° 16' 18.44" N  
127° 44' 25.85" E

森の川公園の  
近くにある遺跡。  
どんな人が住んで  
いたのかな？



## 用語解説

### ●羽衣伝説

男が泉で水浴びをしている天女の羽衣を盗んで、帰れなくなった天女と結婚し子どもをもうける。天女は羽衣のありかを知らなかったが、ある日子どもの歌からその場所を知り、それを身に着け子どもを置いてそのまま天に帰るといふ伝説。日本各地に同じような話が伝わっている。

### ●宜野湾市森の川

宜野湾市真志喜にある湧水。水浴びをしていた天女と奥間大親が出会い、二人の間に生まれた子どもが、後の察度となったという伝説が残る。

### ●名勝

庭園、橋梁、渓谷、海浜、山岳などで、景色のよい場所。

### ●察度

1321年生まれ、1396年没。1350年に中山王となり46年在位した。中国への進貢を初めて行った王である。

### ●掘立柱建物

家を建てる時、柱を安定させるための石を置くが、その石を置かず、直接、柱の下部を土の中に埋めて建てた家。

### ●柱穴

掘立柱建物を建てる時、柱を立てるために掘った穴。

察度の父親とされている奥間大親が住んでいたと伝わっているのだよ。穀物の貯蔵庫があったよだから、中国産のお碗で米や粟や麦を食べていたのかも知れないね。



### ●柱穴



## 発掘調査により当時の建物の規模や貯蔵穴の存在を確認

この遺跡の近くには、羽衣伝説の舞台となった「宜野湾市森の川(県指定名勝)」が所在しています。その伝説に登場する察度(後の琉球国中山王)に関わるとされているのが、真志喜森川原第一遺跡です。この遺跡を発掘調査したところ、約600年前には遺跡一帯で人々が生活し、集落を形成していたことが分かりました。

発掘調査では、住居や倉庫と考えられる掘立柱建物跡やその他の柱穴が多く見つかったことで、当時の建物の規模が把握できました。また、穴の中から炭化した米・粟・麦等が確認された事により、穀物類を貯えておく貯蔵穴が存在した事がわかりました。遺物は中国で作られた陶磁器、地元で作られた土器、石器、鉄製品等が出土した事から、地域の権力者が住む集落であったことがわかりました。

これらの成果から、地域の権力者が実際にどのような生活を営んでいたのかを知る手がかりを得ることができました。



鉄鉄



天目茶碗

### 【参考文献】

- ・宜野湾市教育委員会。1989。『土に埋もれた宜野湾』。
- ・宜野湾市教育委員会文化課。1994。『真志喜森川原遺跡』。
- ・宜野湾市教育委員会。1995。『沖縄人のルーツを探る! :イガルー島宜野湾展』。
- ・宜野湾市教育委員会。2013。『宜野湾はじまりや! ~シマ・ムラ、チネー・イエへの歩み~ 企画展示会図録編』。





## 発掘調査の道具

ためになるかも!?

発掘調査で使用する道具として、みなさんはどのようなものを想像しますか？発掘専用の特殊な道具を使っていると思われるがちですが、特に専用の道具があるわけではありません。

よくテレビなどで紹介される発掘調査の場面として、貴重な遺構や遺物を検出するために、ハケなどで土砂をさらさらと払うところが出てきます。しかし実際は、遺構や遺物が含まれる地層（遺物包含層）が出てくるまでは、パワーショベルなどの重機やクワを利用し、その後ていねいに掘り下げていきます。

主に使用されるのは、農業用、園芸用、大工道具、調理用具、食器などの中から、土を削り、移動するのに適した道具のほか、目印や記録作業に最適なものを選んで使用します。これらは遺跡の種別や調査法・地形・土質、検出する遺構や遺物によっても異なり、現場の調査員や作業員によっても様々です。

沖縄の発掘調査でよく使用される道具といえば、ネジリガマ（ガリ）とよばれる除草用のカマや移植ゴテがあります。これらの道具で土の色や質感を確認しながら、土を薄く削るように平坦に掘り下げていきます。そうすることにより、地層ごとに細かい遺物をこわすことなく回収でき、また、住居跡などの遺構を正確に検出することができます。その他、柱穴などの遺構を掘り下げる際には、ナイフやスプーン、おたまなどの食器を使うと、遺構の形に合わせて検出することができ、人骨や土器などのデリケートな遺物は、竹べらや竹串を使うと、傷つけることなく検出することができます。

次に発掘調査では、調査した場所や地層の堆積状況、遺構や遺物の検出状況などを記録することが重要です。そのため、地球上のどの場所を調査したのかがわかるように、土木工事などで使われている測量機器を用い、遺構や遺物の位置情報と形を図面として記録するとともに、写真撮影を行います。最近では技術が進み、遺構や地形を立体的に再現できる3D計測や、小型無人機（ドローン）での測量や撮影も行われています。



発掘調査で使用する主な道具